大阪・茨木（いばらき）遺跡

1　所在地　大阪府茨木市本町
2　調査期間　第四次調査　二〇〇六年（平18）五月
3　発掘機関　茨木市教育委員会
4　調査担当者　黒須靖之
5　遺跡の種類　集落跡
6　遺跡の年代　古墳時代、中世・近世
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

茨木遺跡は、元茨木川沿いの左岸、市内中心部の阪急京都線茨木市駅の北西に近接して所在し、北から上泉町・東宮町・片桐町・本町・宮元町・元町・大手町にかけて展開する、南北約一km、東西四五〇mの広がりをもつ遺跡である。北側は安威川と茨木川が合流するため閉塞的な地形を呈している。

（大阪東北部）

今回の調査地は、遺跡の中央やや南寄りに位置しており、茨木城跡と推定される茨木小学校から南東に約二〇〇m離れている。茨木城廃城の後に在郷町として今に至ると伝えられ、明治期の地籍図には材木町と位置付けられている。調査面積は二六八㎡。

検出した遺構は、古墳時代中期の溝一条、鎌倉時代から室町時代にかけての溝四条・土坑三基・柱穴群、織豊期から江戸時代初期にかけての流路一条、江戸時代（一七世紀から一九世紀まで）の道路遺構・用水路・竪穴二基・溝五条・廃棄土坑一五基・柱穴群である。特に、流路からは、おさ欄間・明かり障子・遣り戸・壁板材・床板材・角柱材・丸太材などの建具がまとまって出土している。

木簡は、織豊期から江戸時代初期の遺物包含層から一点、江戸時代の東西溝SD三・土坑SK六から各一点、計三点出土した。SD三は長さ五・〇m以上、幅三・〇m深さ〇・三mを測り、SD四・五やSK七～一二と重複する。SK六は長軸一・九m短軸〇・五m深さ〇・五mの長楕円形の廃棄土坑である。SD三からは平瓦・丸瓦・肥前染付茶碗（一七世紀後半）・呉器手・漆器椀・曲物・多量の部材、SK六からは平瓦・丸瓦・多量の部材が共伴して出土した。

8　木簡の釈文・内容

遺物包含層

(1)　・「○鍵」
　　・「○鑰」　120×80×23　065

SD三

(2)　・本村久□郎〔太カ〕」
　　・本村久太□〔郎カ〕」　(107)×(23)×6　081

SK六

(3)　「□〔為カ〕□〔示カ〕」　(32)×92×2　065

(1)は、ヒノキ材の板状品である。将棋の駒に似た形状を呈するが、厚さ二三㎜を測る大型品である。角の一部に摩滅痕跡を残すものの、ほぼ完存する。上端部には、直径八㎜の釘孔があり、内部には表面から打ち込まれた木釘片が残存する。孔の周辺には、使用痕と考えられる欠損が認められることから、本来は紐などを通して使用されていた可能性が高い。裏面の墨書は表面ほど明瞭ではない。用途はカギの付札、もしくは柱などに打ち付けてカギの保管場所を表示したものか。

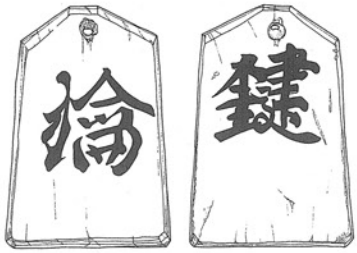
(2)は、スギの柾目材で、下端は原形をとどめるが、上端と左右両辺は欠損する。墨書の状況から、元は幅二・五㎝程度の短冊型であった可能性が高い。表裏両面とも数カ所に削痕や切痕が認められる。両面ともに「本村久太郎」という名を記したものとみられるが、表裏で書体が異なる。なお、本村が姓であるのか、村名称の一部であるのかは不明である。

(3)は、ヒノキの柾目材で、木目と直交する方向に二文字確認できる。右辺を欠損するものの、上下両端及び左辺は原形をとどめる。三カ所に細い木釘が残存することから、折敷や容器の蓋板であったと推測される。右側の文字は、「禾」の下に「一」を加えたような字形で、「蒸」の可能性もある。左側の文字は、「等」の異体字の可能性もある。

9　関係文献

黒須靖之「茨木遺跡の調査成果」(財)大阪府文化財センター編『大阪府埋蔵文化財研究会(第五三回)資料』、二〇〇六年)

茨木市教育委員会『平成一八年度発掘調査概報　茨木遺跡』(二〇〇七年)



(1)

(2)

(3)

(黒須靖之・黒須亜希子)